

不変化詞UPの意味論的研究\*  
—エネルギー消費という観点からの一考察—

Where should we place Intensifying UP in the meanings of UP?

博士前期課程 英文学専攻 1993年度入学

防 越 敏 彦

Toshihiko Bougoshi

## 0. 序

一つの語が二つ以上の意味を持つことはよくあることである (cf. Lakoff 1987)。例えば *ear* という語は主として次の二つの意味で用いられる：

- 1 the part of the body specialized for the perception of sound
- 2 the grain-bearing spike of a cereal plant [*Webster's New World Dictionary*<sup>3</sup>]

この場合は、一つの語が二つの意味を持っているのではなく二つの語が存在しており、homonymy (同音異義) と呼ばれているものである。次に *grasp* という語を考えてみる。この語の主な意味は：

- 1 to take and hold something firmly
- 2 to completely understand a fact or an idea, especially a complicated one [*LDOCE*<sup>3</sup>]

である。この場合は一つの語が二つの意味を持っており、その意味は互いに関連している。これは polysemy (多義) と呼ばれているものである。では様々な意味で使用される UP という語は homonymy と polysemy のどちらの例であろうか。

英語の UP という語は副詞、前置詞、形容詞、動詞など様々な品詞で用いられる。しかしその大部分は副詞及び前置詞としての用法であり、様々な動詞と共に用いられる。そのため本稿では、副詞と前置詞の総称として「不変化詞」(particle) という用語を用い、動詞+不変化詞、言い替えると、the Verb-Particle Construction (以下 VPC)<sup>1</sup> という点から論じてゆくことにする。すなわち (1) にあげてあるような構文を扱ってゆく。

- (1) a. He climbed up the mountain. (前置詞としてのUP)
- b. She ate the sandwich up. (副詞としてのUP)

## 1. 先行研究とその問題点

### 1.1. Fraser (1974) 及び辞書

従来の研究においてはparticleは意味の無いもの、言い替えると VPC に対し意味的な貢献をしていないもの、と扱われてきた。例えば Fraser (1974) では VPC を統語的及び音韻的には詳しく分析しているが、意味的なことについてはあまり議論していない。そして次のようなアペンディクスをあげている：

- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| (2) a. hide away = to hide | e. seek out = to seek    |
| b. dent in = to dent       | f. fatten up = to fatten |
| c. level off = to level    | g. hurry up = to hurry   |
| d. cool down = to cool     |                          |

このような扱いは現行の辞書においてもほとんど同様である。例えば COBUILD<sup>2</sup>では：

- (3) a. **Add up** means the same as **add**.  
b. **Coil up** means the same as **coil**.  
c. **Finish off** and, in American English, **finish up** mean the same as **finish**.  
d. **Start up** means the same as **start**.  
e. **Swell up** means the same as **swell**.

と定義されている。しかし全ての VPC においてparticleには意味が無いと主張されているわけではない。一般的に particle の無い構文 (the Bare-Verb Construction) と VPC の意味がかなり違うと判断される時は、意味のあるものとして phrasal verb や verbal idiom として扱っている。逆に、意味の違いはあまり無いと判断される時には、particle はオプションである、とされる傾向がある。しかしその判断基準がはっきりしているわけではない。また Bolinger (1977) やその他多くの認知言語学者が主張しているように、形が違えば意味も違うはずである。私もこの立場を取り、いかなる場合も particle は VPC に対し意味的な貢献をしていると考える。

### 1.2. Lindner (1981)

しかし全ての論文等が particle には意味が無いと主張しているわけではない。Lindner (1981) は Space Grammar<sup>2</sup>の枠組みでOUTとUPを用いた VPC を分析しているが、彼女は particle を意味のあるものとし、UPについては Vertical UP と Goal-Oriented UP の二つのスキーマを提案している：

#### (4) Vertical UP

- a. The rocket shot (straight) up.  
b. Can you heat up the room a little more?

#### Goal-Oriented UP

- c. He walked / rushed up and said hello.

d. I finally finished up my paper.

(4a) は UP における最も代表的な意味で、物理的な空間において、ある実体が垂直軸に沿って上昇するというものである。(4b) は温度という抽象的な認知領域へメタファーにより投射されたもので、ここでも温度というものを「上下」、すなわち温度の高い方を「上」、低い方を「下」ととらえている。これに対し Goal-Oriented UP は何かしらの目標点（ゴール）へ近づくというものである。(4c) はある場所へ近づくという例であり、(4d) はある状態へ近づくというものである。(4a-c) は特に問題は無いが、(4d) については問題がある。この文は ‘not-finished’ という状態から ‘finished’ という状態へと変化する状況を表わしているが、ここでは UP が無くても同じ状況を表現できる。私はこの UP のある場合と無い場合の意味の違い、及び UP の個々の意味関係を説明するために、後の分析のところで第三のスキーマ ‘Intensifying UP’ を提案する。

## 2. UP の意味分析

本稿は「エネルギー消費」(Expulsion of Energy) という点から分析を進めてゆくので、最初に本稿でいう「エネルギー」について簡単に述べておくことにする。我々は毎日人や物事との相互作用を通して様々な経験をする。そしてその際にエネルギーを消費する。例えばスポーツをしている時のことを考えると分かる通り、その際には体力、すなわちエネルギーを消費する。このような日々の経験から「意識している」「意識していない」は別として、エネルギー消費というものが言語表現にも反映されているのではないか、という仮説を立て、この点から論じてゆく。ただし、ここで言うエネルギーとは「体力」というような狭い意味だけではない。POD<sup>8</sup>によると *energy* は：

- 1 capacity for activity, force, vigour
- 2 capacity for matter or radiation to do work

と定義されている。本稿ではこの辞書の定義を合わせたような広い意味で「エネルギー」ということばを用いている。また Trajector (TR) と Landmark (LM) という概念を用いるが、TR は移動物、LM はその移動に対する対象物である。

### 2.1. Vertically-higher UP

#### 2.1.1. UP in Physical Domain

まず最初に次の例文を考えてみる：

- (5) a. The rocket shot (straight) up<sup>3</sup>.
- b. He tossed up the ball.
- c. The kite floated up.

これらの文は TR である rocket や ball などが時間の経過とともに地面を離れてゆく状況を表わしている。地面から重力とは反対方向へ移動するというのは UP によって表わされるベクトルと一致する。しかしこれらの文のように地面から離れる必要はない。例えば次の (5d-f) では TR は地面や

それに類するものに接触している：

- (5) d. The cat climbed up the tree.
- e. I was so tired I couldn't get up the stairs.
- f. They boosted up the child for a better view.

つまり典型的な UP は物理的（空間的）認知領域において TR の上方移動，言い替えると重力とは反対方向への移動をコード化している。すなわちエネルギーを上方移動に用いている。そしてその際の LM は地面など垂直軸上のある一点である。UP におけるこのような意味を私は **Vertically-higher UP** と呼ぶことにする。図に描くと次のようになる：

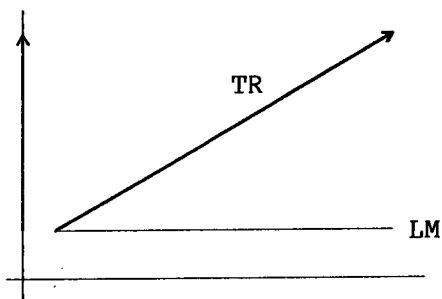


Fig. 1

物理的認知領域におけるその他の Vertically-higher UP には次のようなものがある：

- (6) a. Bulldozers piled up huge mounts of dirt. (cf. Fig. 2)
- b. My foot swelled / ballooned up. (cf. Fig. 3)
- c. Set up the chess pieces.
- d. Please sit up. Don't slouch!
- e. I was / sat / stayed / waited up till midnight.

図に描くと全く異なった状況のように感じられるが，いずれも時間の経過とともに TR（または TR の一部）が垂直軸上のある一点である LM よりも上（重力とは反対方向）へ移動したと我々は認識し，UP という語で表わしているため，結局は Fig. 1 にスキーマ化できる。

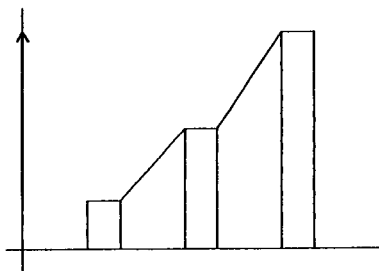


Fig. 2

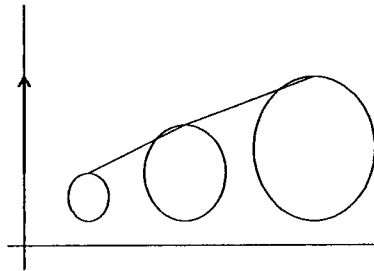


Fig. 3

### 2.1.2. UP in Abstract Domain

前節では物理的認知領域における UP を分析したが、UP は抽象的認知領域においても用いることができる：

- (7) a. Can you heat up the room a little more?
- b. Prices shot / went up.
- c. He was speeding up when the cop caught him.
- d. The film editor faded / turned up the sound.

これらの文が表わしているのは「温度」、「価格」、「スピード」、「音量」といった抽象的な概念である。にもかかわらず我々は「上下」(UP-DOWN) という物差しで物事をとらえている。本来「上下」という概念は物理的な認知領域におけるものである。しかし我々はメタファーにより「上下」という概念を抽象的認知領域へ投射し、物理的認知領域と同じように「上下」というとらえかたをしている (cf. Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1987; Sweetser 1990)。

### 2.1.3. The Region of Interactive Focus

次に考えるのは Lindner (1981) が The Region of Interactive Focus (以下 RIF) と呼んでいるものと関連についてであるが、本稿の主眼点は UP における第三のスキーマを提案することであるため、ここでは簡単にアウトラインを述べるにとどめる。

我々はこの地球上において、五感を用いて様々な経験をする。例えば視覚を考えてみると、何かが「見える」ためにはその対象物が我々のある程度近くにあり、視野に入っていないといけない。つまりその対象物があまりにも遠い所にあったり、土の中に埋まっていると我々はそれを見ることができない。聴覚など他の五感についても同様のことが言える。これらの日々の経験から我々は見える範囲、聞こえる範囲、手を伸ばせば触れることができる範囲などを特別なステイタスを持った領域、と考えているように思う。またこの領域は心理的にも存在しているように思う。Lindner はこのような領域を RIF と呼び、次のように定義している：

- (8) RIF—the realm of shared experience, existence, action, function, conscious interaction and awareness.

UP はこの RIF に入ってゆく経路 (9) と、ここから出てゆく経路 (10) を表わすことができる：

- (9) a. A wind sprang up.
- b. I picked up this nifty hat at the fleamarket.
- c. My knee is acting up again.
- d. She comes up for reelection in April.
- (10) a. Hang / put up your sword.
- b. I said good-by and hung up.
- c. The bank has failed up.

- d. He was getting used up.

以上が Vertically-higher UP の主なものである。いずれも物事を「上下」という物差しでとらえ、物理的及び抽象的に「上」という方向（重力とは反対の方向）へエネルギーを消費している、と分析できる。

## 2.2. Approach UP

### 2.2.1. UP in Physical Domain; Change of Location

まず次の例を考えてみる：

- (11) a. He came up and began to talk to us.  
b. He walked / rushed up and said hello.  
c. He moved up to the end of the line.  
d. They' re closing up on us.  
e. Draw a chair up and sit down.

これらの文における UP は Vertically-higher UP とは違い、もはや垂直性を示唆したりはしていない。ただ単に、どこかへ近づいてゆく際の経路を表わしているにすぎない。私はこの種の経路を表わす UP を **Approach UP** と呼ぶことにする。我々は移動する際、普通は出発点 (source) があり、経路 (path) に沿って移動し、最終的な目標地点 (goal) に到着する。Approach UP はこの経路を表しているが、必ずしも垂直性は示唆してはいない。ここではエネルギーを接近、すなわち Approach ということに用いている、と言える。なぜなら人や物事は何かしらのエネルギーを消費しない限り、移動することができないからである。(11) の Approach UP は「場所」という LM へ近づいてゆく。すなわち「場所の変化」(Change of Location) を表わしている。

### 2.2.2. UP in Abstract Domain; Change of State

前節で扱った UP に対し、抽象的認知領域における Approach UP は「状態」の LM に関わりがある。まず例として次の文を考えてみる：

- (12) a. He joined up one wire to the other.  
b. My shirt shrank up when you washed it!  
c. We need to chop / slice / dice up the carrots.  
d. She wrapped the bottle up in her scarf.  
e. We drank up the wine yesterday.

(12a) はもともと離れている二つのワイヤーを 'Joined' という状態へと変化させる状況を表わしている。つまり Joined という状態が LM であり、そこへ近づいてゆくのである。(12b-e) も同様である。(12b) では Compact, (12c) では Divided, (12d) では Covered, (12e) では Extinct という状態へそれぞれ近づいてゆく。抽象的認知領域における Approach UP は状態の変化 (Change of

State) を表わしている。物事は何かしらのエネルギーを消費しない限り、変化することができない。Approach UP はある場所（物理的なLM）や状態（抽象的なLM）へ近づいてゆくイベントを表わしている、と分析できる。従って次のようにスキーマ化できる：

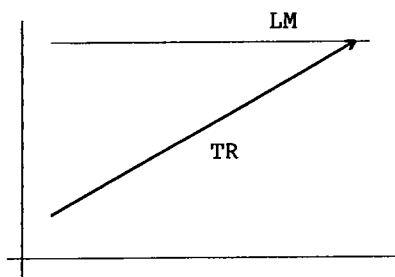


Fig. 4

## 2.3. Intensifying UP

以上が一般的に言語学及び辞書において分析・記述されている UP の主な意味である。しかし冒頭で述べたように、これだけでは不十分である。そのため本稿では、VPC は Bare-Verb Construction よりも多くのエネルギー消費をコード化している、ということを論じてゆく。

### 2.3.1. Type 1

まず次の二つの文を比較してみる：

(13) a. She got dressed.

b. She got dressed up.

ネイティヴ・スピーカーによると、(13a) はただ単に洋服を着た、という意味であり、一方 (13b) は洋服だけでなく、化粧をしたり、アクセサリや香水をつけたりなど、洋服プラス・アルファを意味する<sup>4</sup>。ただ、(13b) において、UP がプラス・アルファの部分を表わしているというよりは、*dress up* 全体で洋服プラス・アルファを表わしているため、これらの文の違いをはっきりと図に描くのは難しいが、あえて書けば Fig.5 のようになる。ここでは Bare-verb によって示される最終的な状態を仮の LM とし、VPC はその状態よりもさらなる変化を意味している、と考えることができる。*Dress up* は着飾った状態になる、という意味においては Approach UP を伴う VPC であると言える。しかし UP を用いることで *dress* プラス・アルファを表わすという意味においては、この UP には強意の機能があると言うことができる。

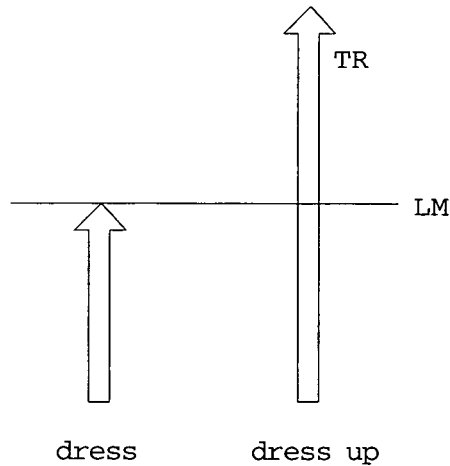


Fig.5

「エネルギー消費」という点から考えるともう少しはつきりする。Fig.5 の矢印はエネルギー量を表わしている。我々はただ洋服のみを着るよりも、それ以外に色々なことをするほうが、よりエネルギーを消費する。つまり矢印で表わした場合、矢印の長いほうが、何かしらの形でエネルギーを多く消費している、と考えることができる。次の文においても同様のことが言える：

(14) a. John fixed his bike.

b. John fixed up his bike.

(15) polish (up), loosen (up), harden (up), etc.

(14a) は John が自転車の故障した部分を直したことを意味するが、(14b) はそれだけでなく、自転車を磨くなど、Bare-verb プラス・アルファを含意している。VPC のみを分析した場合、*dress up* や *fix up* は Approach UP を伴う VPC であると判断できる。しかし Bare-Verb Construction と比較した場合には、強意の機能があると考えられる。私は UP におけるこの種の意味を **Intensifying UP**<sup>5</sup> と呼ぶ。Intensifying UP は Bare-verb によって表わされる状態とはまた別の状態を表わしている。すなわち VPC のゴールは Bare-verb のそれとは異なっているのである。(15) の例についても同様のことが言える。

### 2.3.2. Type 2

次に(16) の例を考えてみる：

(16) a. I finally finished my paper.

b. I finally finished up my paper.

ここでは Type 1 の例と違って最終的なゴールは同じである。つまりレポートを10枚書いたとすれば、書き終わった状態というのは同じである。すなわち図に書くと次のようになる：



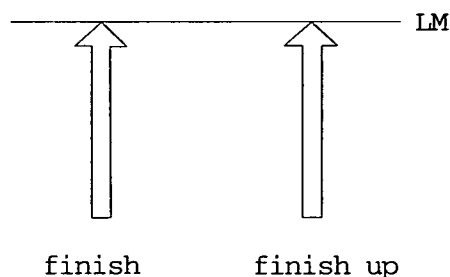


Fig.6

しかしこのように分析すると UP の意味的貢献がはっきりせず、冒頭の *COBUILD*<sup>2</sup> と同じように *finish* と *finish up* は同じ意味である、という結論になってしまう。ではこの UP は意味的には、構文に対しどのような貢献をしているのであろうか。Type 1 のところで述べたように、UP を用いるということは、話者がより多くのエネルギー消費を含意している、という立場から考えると意味の違いがはっきりする。すなわちレポートを書く際により多くエネルギーを消費するというのは、読み直ししたり、書き直ししたりなど、時間をかけて推敲することにつながる。つまり、同じ10枚のレポートを書いたという状態になる前に、より多くのエネルギーを使っているのである。従って正確に書き直すと Fig.6 (Type 2) は次のFig.7 のようになる：

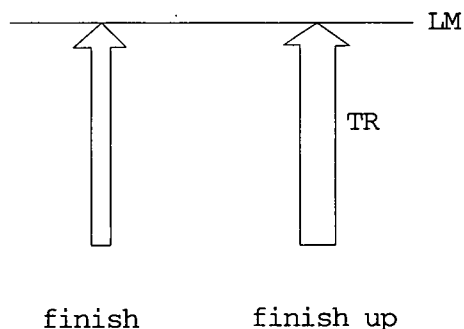


Fig.7

同様の例は次のペアにおいても見られる：

(17) a. He broke the vase.

b. He broke up the vase.

(18) shut (up), bundle (up), lock (up), bake (up), etc.

花瓶を割る、という状況を表現する際、普通は *break* よりも *break up* と言うほうが、より小さな破片になることを含意する。同じように花瓶が *broken* という状態になるとしても、花瓶により多くのエネルギーが伝わる（または話者がそのように判断した）と考えると、花瓶がより小さな破片になる、ということが説明できる。(18)についても (17) 同様、Fig.7 のようにスキーマ化できる。

### 2.3.3. Type 3

前節で分析した Intensifying UP のスキーマは Approach UP と密接に関わっていた。つまり LM が矢印の先にあった。ここでは Vertically-higher UP と関わっている Intensifying UP を考える。まず次の文を比較してみる：

(19) a. I heated this coffee.

b. I heated up this coffee.

(20) jump (up), leap (up), stack (up), hot (up), add (up), start (up), etc.

(19) はどちらもほとんど同じ客観的状況を表わしている。すなわちコーヒーの温度が高くなったというものである。しかし (19b) は (19a) よりもコーヒーの温度が高くなった、ということを含意できる。ただ、(19b) の物理的、客観的状況が (19a) のそれと同じである、すなわち (19b) におけるコーヒーと (19a) におけるコーヒーの温度が同じであることも可能性としては十分ある。しかしその場合でも、文の話者が温度の変化を強調しているという点で、(19b) の UP には強意の機能がある。言い替えると、話者が「心理的に」よりエネルギーを消費しているのである。(20) についても同様である。従って Type 3 の Intensifying UP は次のようにスキーマ化できる：

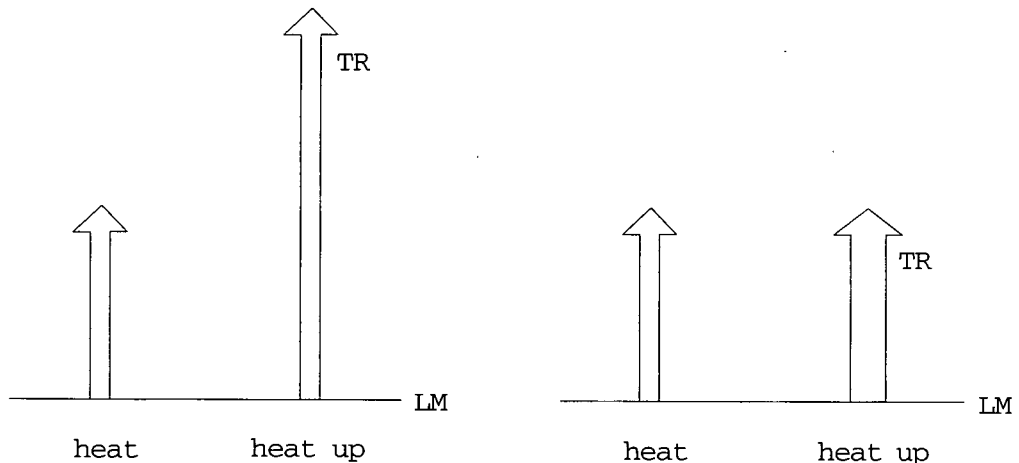


Fig.8

これまでに三種類の Intensifying UP を提案してきたが、ここでその関係について考えてみる。先に述べたように、図 (Fig.5,7,8) の矢印は消費されるエネルギー量を表わしている。すると、それぞれの矢印は形は違っているが面積は同じである。つまりいずれの矢印も同じだけのエネルギー消費を表わしているのである。従って Type 1 から Type 3 までの三種類の Intensifying UP は結局は同じものである、と言える。参考までに言うと、同様の趣旨のことは物理学においても主張されている：

(21) 仕事量 = 力の大きさ × 力の向きに移動させた距離

WORK                  FORCE                  DISTANCE                  (W=Fs)<sup>6</sup>

この公式は、仕事量(我々のエネルギー消費量にあたる)を矢印で表わした場合、矢印の長さや太さは違っていても、面積が同じであれば仕事量は同じである、という意味である。このことから、三種類のIntensifying UPは同じものであり、一つにまとめることができるように思う。

冒頭で、従来の研究は particle の扱いについてはっきりした基準を設けていない、と指摘した。つまり、*finish up* や *heat up* などにおける UP は(あまり)意味の無いものとし、オプショナルである、としている。一方、*dress up* などにおける UP については、有意味なものとし、*phrasal verb* や *verbal idiom* の一部として扱っている。しかし「エネルギー消費」という点からの分析においては、いずれの場合も Bare-verb と比較するとより多いエネルギー消費を含意し、VPC に対し意味的貢献をしているので、従来の研究や辞書のように、判断基準がはっきりしないまま分ける必要はない。

#### 2.4. Vertically-higher UP, Approach UP, Intensifying UP の関係について

最後に三種類の UP、すなわち Vertically-higher UP (UP-1)、Approach UP (UP-2)、Intensifying UP (UP-3) の関係について考えてみる。なお UP-3 については三種類のサブ・スキーマを提案したが、Bare-verb とはゴールが違っている Type 1 をプロトタイプとする。

まず UP-1 と UP-2 についてであるが、例としてグラスに水を注ぐ状況を考えてみる。一般に *fill up* という表現で示される状況である。この UP は UP-1、UP-2 のどちらであろうか。グラスに水を注ぐにつれて水の水面は垂直軸に沿って上昇してくる。この点においては UP-1 である、と解釈できる。しかし同時に、水面はグラスの「ふち」という最終的な位置に近づいてゆく。この点においては UP-2 であるとも考えることができる。つまりこれらは解釈の違いであり、UP-1 と UP-2 ははっきりと分けることはできない。

次に UP-3 と UP-1 についてである。これは Type 3 のサブ・スキーマ (Fig. 8) を考えるとよく分かる。*heat up* の UP は VPC のみを分析すると UP-1 のみが導き出される。しかし Bare-verb との比較を考慮に入れると UP-3 も導き出される。従って、これについてもはっきりと分けることはできない。UP-2 と UP-3 との関係についても同様である (Type 2 のサブ・スキーマ (Fig. 7) を参照)。つまり、これまでの分析では便宜上別個に扱ってきたが、三種類の UP ははっきりと区別して、これは UP-1、これは UP-2、これは UP-3 というようには区別できず、三種類の UP が相互につながっている、もしくは重なり合っていると言える。すなわち三種類の UP 全体でゲシュタルト的な構造を持っているのである。従って UP の意味構造は最終的には Fig. 9 のように表わすことができる。

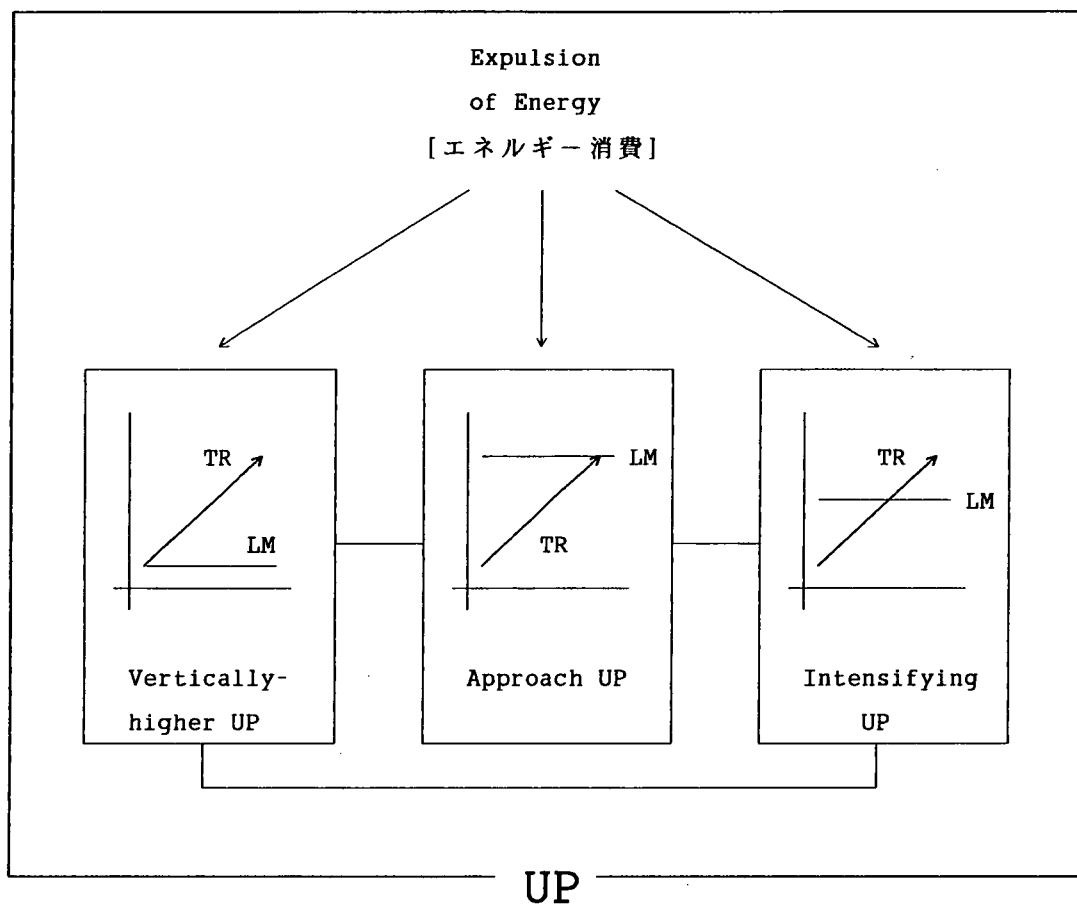


Fig. 9<sup>7</sup>

ただ UP の意味について言えるのは、何かしらの場所の変化、及び状態の変化を伴う、ということである。確かに語源的に見ても、現代英語における使用頻度を見ても、最も典型的なものは UP-1 である。しかし「エネルギー消費」という点からの分析においては UP-2 がかなり中心的な役割を果たしていると言える。認知言語学においては Source-Path-Goal というイメージ・スキーマが提案されており、Talmy (1985) は英語の particle について次のように言っている：

(22) The satellites (particles—TB) in English are mostly involved in the expression of Path.

UP-2 の 'Approach' という概念はこの Path をフォーカスとしているので、UP という particle における UP-2 の中心的な役割が Talmy の分析・主張からも裏づけられる<sup>8</sup>。

### 3. まとめと今後の課題

本稿で分析してきたことをまとめると次のようになる：

- 英語のUPという particle は様々な意味で用いられるが、決して同音異義語ではなく、多義語 (polysemous word) である。
- UP というカテゴリーの中で周辺的な意味は元々の「上」という感覚を失っている。しかしメタファーやイメージ・スキーマ変形などによって動機づけられており、恣意的ではない。
- UP の意味をより適切に分析・記述するためには、「エネルギー消費」という点から Intensifying UP を提案する必要がある。

本稿を締めくくるにあたって、次のことを今後の課題として指摘しておく。今後 UP と他の particle との意味関係について研究を進める必要がある。例えば、一般に UP の反義語は DOWN とされている。しかし、カーベットなどを「巻き上げる」という意味での *roll up* の反義語は *roll down* ではなく *roll out* である。また UP は完了性を表わすことができるが、OUT, DOWN, OFF, THROUGH などによっても完了性を表わすことができる。このようなことから UP が他の particle とはどのような関係にあるのか、particle全体の中で UP はどのような位置を占めているのかについて研究する必要がある。

注

- \* 本稿は大学院英文学専攻課程協議会第29回研究発表会（1995年11月25日 於明治大学）において口頭発表した原稿に加筆・訂正したものである。なお発表会当日、及び本稿作成の段階で堀内克明教授（明治大学）、千葉修司教授（津田塾大学）、久保田俊彦氏（明治大学専任講師）、長井信也氏（青山学院大学大学院）、高梨博子氏（日本女子大学大学院）をはじめ、多くの方にアドバイスやコメントをいただいた。ここで改めてお礼申し上げる。また常に励まし応援してくれた防越詔子、アヤ子の二人にも心から感謝をしなければならない。
- 1 Verb-Particle Construction は次のように様々な名称で呼ばれることがある： verb-particle combination, phrasal verb, group verb, verbal idiom, two word verb with adverbial use of the adprep, など。
- 2 cf. Ronald W. Langacker (1982) 'Space grammar, analysability, and the English passive.' *Language* 58 (1) : 22-80.
- 3 本稿における例文は英米で出版された辞書、論文、雑誌などから集めたものである。
- 4 (13b) は質の高い洋服を着た、という解釈も可能である。その場合は「品質」というものを「上下」、すなわち良い質のものを「上」、悪い質のものを「下」ととらえているので、Vertically-higher UPと関わりがある。
- 5 エネルギー消費に焦点が当たっているという点ではEnergetic UPと呼ぶことも可能である。
- 6  $W = Fs \cos \theta$  という公式も同様である。
- 7 三種類のスキーマ間を結んでいる線は、各スキーマが独立しているのではなく、相互に関係していることを表わしている。
- 8 同様の趣旨のことはLindner (1981) も主張している。

参考文献

- 秋元実治 (編). (1994) 『コロケーションとイディオム——その形成と発達——』. 東京: 英潮社.
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Bougoshi, T. (1995) *What's UP?: A Semantic Analysis of the Verb-Particle Constructions with UP*. MA thesis. Meiji University.
- Brinton, L.J. (1988) *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and post-verbal particles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, R. (1978) 'Review of Fraser 1974.' *Journal of Linguistics* 14: 313-21.
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon Press.
- Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*. Tokyo: Taishuukan.
- Hawkins, B. (1984) *The Semantics of English Spatial Prepositions*. Ph.D Dissertation: University of California, San Diego.
- . (1993) 'On universality and variability in the semantics of spatial prepositions.' In C. Zelinsky-Wibbelt. ed., *The Semantics of Prepositions: From mental processing to natural language processing*. 327-49. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Herskovits, A. (1987) *Spatial Prepositions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johnson, M. (1987) *The Body in the Mind: The bodily basis of reason and imagination*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- . (1990) 'The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image schemas?' *Cognitive Linguistics* 1-1: 39-74.
- Lakoff, G. and C. Brugman. (1986) 'Argument forms in lexical semantics.' *BLS* 12: 442-54.
- Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1, Theoretical Prerequisites. Stanford: Stanford University Press.
- . (1991a) *Concept, Image, and Symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- . (1991b) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2, Descriptive Application. Stanford: Stanford University Press.
- Lindner, S. (1981) *A Lexico-Semantic Analysis of English Verb-Particle Constructions with OUT and UP*. Ph. D Dissertation: University of California, San Diego.
- . (1982) 'What goes up doesn't necessarily come down: The ins and outs of opposites.' *CLS* 18: 305-23.
- Lipka, L. (1972) *Semantic Structure and Word-Formation: Verb-particle constructions in contemporary English*. Munich: Wilhelm Fink Verlag.
- 水野修身. (1994) 'UPを伴う句動詞の意味分類の提示に関する試論' 『富士フェニックス論叢』 2: 21-34.
- Morgan, P.S. (1995) "Figuring out 'Figure out': Semantics and the phrasal verb." Unpublished ms. University of California, Berkeley.
- 長井信也 (1995) '語の多義性と文法構文: エネルギー消費という観点からの一考察' 第28回青山学院大学英文学会大会. 1995年12月9日. 口頭発表.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 瀬戸賢一. (1995) 『空間のレトリック』. 東京: 海鳴社.
- Svorou, S. (1994) *The Grammar of Space*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sweetser, E.E. (1986) 'Polysemy versus abstraction: Mutually exclusive or complementary?' *BLS* 12: 515-27.

- . (1990) *From Etymology to Pragmatics: The mind-as-body metaphor in semantic structure and semantic change*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Talmy, L. (1978) 'Figure and Ground in complex sentences.' In J.H. Greenberg. ed., *Universals of Human Language*, Vol. 4 : 625–49. Stanford : Stanford University Press.
- . (1983) 'How language structure space.' In H. Pick and L. Acredolo, eds., *Spatial Orientation: Theory, Research, and Application*. 225–82. New York; Plenum Press.
- . (1985) 'Lexicalization patterns; Semantic structure in lexical forms.' In T. Shopen ed., *Language Typology and Syntactic Description*. Vol. 3. 57–149. Cambridge : Cambridge University Press.
- . (1988) 'Force dynamics in language and cognition.' *Cognitive Science* 12 : 49–100.
- Taylor, J.R. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford : Clarendon Press.
- Traugott, E.C. (1978) 'On the expression of spatial-temporal relations in language.' In J.H. Greenberg. ed., *Universals of Human Language*. Vol. 3: 369–400. Stanford : Stanford University Press.
- . (1986) 'Form polysemy to internal semantic reconstruction.' *BLS* 12 : 539–50.
- Vandeloise, C. (1986) *L'espace en français: Sémantique des prépositions spatiales*. Paris : Editions du Seuil. [*Spatial Prepositions*. (1991) . Translated by A.R.K.Bosch. Chicago : The University of Chicago Press.]
- Vestergaard, T. (1974) 'Review of Bolinger 1971.' *English Studies* 55 : 303–8.
- 山梨正明. (1995) 『認知文法論』. 東京：ひつじ書房.